開催にあたり

“縄文の美”の発見者、その栄誉に輝く画家の岡本太郎が、一九五二年二月発行の『みづゑ』、および一九五六年九月発行の『日本の伝統』において、縄文土器の最も大きな特徴として挙げたのは、「はげしく、するどく、縦横に奔放に躍動し、くりひろげられる」中期土器の隆線紋のモチーフであった。それ以降、中期土器に対する美術的評価が定着することとなった。辻惟雄も『日本美術の歴史』（東京大学出版）の中で、「縄文人の『かざり』への熱中は頂点に達する。粘土を貼り付けて凹凸に富んだ大形の鉢が、土器とも彫刻ともつかぬ力強い空間表現をつくり出す。実用性をはるかに超える芸術的表現のさまざまが生み出された」と記述している。

美術史家が「実用性をはるかに超える芸術的表現」と見なす土器や土偶の中に、時期と地域を限って作られた、ひときわ目に着く造形・装飾をもつ考古遺物がある。日常用具に求められる機能性・効率性・利便性などをあえて否定していて、私は“過剰デザイン”と呼んでいる。過剰デザインは地域集団の自己アピール（アイデンティティ表現）で、社会的メッセージが込められていた。

縄文時代中期中葉（約五〇〇〇年前前後）の関東甲信越地方は、大型の環状集落が形成され、人口増加のピークを迎えていた。隣接する地域集団は競合しつつ彼らの土器（阿玉台式、勝坂式、藤内・井戸尻式、焼町土器、火焔型など）を過剰に装飾して、自らの存在を誇示していた。

気候が冷涼化するに伴い、彼らの繁栄は終焉を迎えた。人口は急減し、華やぎは消えてしまった。同じころ、後・晩期（約四五〇〇～二五〇〇年前）の東北地方北部・北海道南西部の地域集団は、冷涼気候に対応した新しい生活世界を構築し、中期とは異なる造形・装飾の装置や「第２の道具」でその存在を表出した。

今回は前・中期と後・晩期に大別して、両時期を代表的する土器・土偶などの逸品を取り上げ、それらが製作された社会的な背景について話してみたい。

安斎正人

講師プロフィール

安斎正人（あんざい・まさひと）

1945年中国（海城）生まれ。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。2003年学位論文『旧石器社会の構造変動』（早稲田大学、文学博士）。2008年から東北芸術工科大学東北文化研究センター教授。研究テーマは東北地方を中心とする縄紋社会の構造変動。『日本人とは何か：考古学がいま語れること』（柏書房、2010年）、『気候変動の考古学』（同成社、2012年）など。

シンポジウム

東北地方を中心とした 中山間地域の未来を考える

―放射能汚染以降、東北の自然再生をめざして―

―プログラム―

「鳥獣保護法改正と現場　～山形県置賜地域の現状から～」
二瓶秀憲（山形県置賜総合支庁環境課）

「原発事故からの復興を目指して　～野生動物管理と狩猟～」
今野文治（新ふくしま農協）

「放射能汚染以降　マタギ文化の行方」
田口洋美（東北芸術工科大学東北文化研究センター・狩猟文化研究所）

平成27年6月27日（土）
午後3時半～5時半（開場午後3時）
東北芸術工科大学 407教室（本館4F）

■主催
東北芸術工科大学東北文化研究センター
■後援
山形県・山形市・山形県猟友会
■協力
狩猟文化研究所
■お問い合わせ
東北芸術工科大学東北文化研究センター
〒990-9530 山形市上桜田三丁目4番5号
TEL.023-627-2168　FAX.023-627-2155
E-mail：tobunken@aga.tuad.ac.jp
URL：http://gs.tuad.ac.jp/tobunken/
■入場無料・申し込み不要

入場無料

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業『環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究』

TOHOKU UNIVERSITY OF ART & DESIGN

25 年度現地説明会の様子

国指定史跡「日向洞窟」発掘６０周年記念事業

国指定史跡日向洞窟発掘 60 周年記念講演会

眠りから覚めた日向洞窟 ―その魅力に迫る

平成 27 年 9 月 12 日（土）14：45～17：00

屋代地区公民館（多目的ホール）　〈 申し込み不要・無料 〉

〒992-0342 山形県東置賜郡高畠町竹森 55　TEL.0238-52-0069
問い合わせ／高畠町教育委員会社会教育課
〒 992-0392　山形県東置賜郡高畠町大字高畠 436　TEL.0238-52-4472

主　　催／高畠町教育委員会、高畠町文化財保護会
東北芸術工科大学東北文化研究センター

文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業『環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究』

同日開催　**日向洞窟遺跡発掘調査現地説明会（詳細裏面）**

国指定史跡「日向洞窟」発掘６０周年記念事業

国指定史跡「日向洞窟」発掘６０周年記念講演会
テーマ「眠りから覚めた 日向洞窟　―その魅力に迫る」

趣旨

国指定史跡「日向洞窟」遺跡は、昭和３０年、故柏倉亮吉山形大学教授により最初の調査が行われ、今年で６０周年を迎えます。この間、日向洞窟の重要性が評価され、昭和 52 年には国指定史跡として指定されています。また、この日向洞窟の調査が、昭和 30 年代に全国規模で実施される洞窟・岩陰遺跡調査の契機となったことは周知の事実です。高畠町内においても、一ノ沢岩陰、尼子岩陰、神立洞窟、火箱岩洞窟などが次々と調査され、縄文時代草創期研究に大きな成果が得られました。高畠町のみならず、日本国内の遺跡を語る上で、この日向洞窟は最も重要な遺跡であり、発掘６０周年を迎えるにあたり、あらためてその価値を確認し、理解を深めていただくために、全国的な視点で講演会を開催するものです。

プログラム

第１部　講演会

講演１「蘇る日向洞窟～芸工大の発掘調査速報～」
　　長井 謙治（東北芸術工科大学歴史遺産学科専任講師・東北文化研究センター研究員）
講演２「高畠町内の史跡洞窟の保存と活用」
　　水ノ江 和同（文化庁文化財部記念物課文化財調査官）

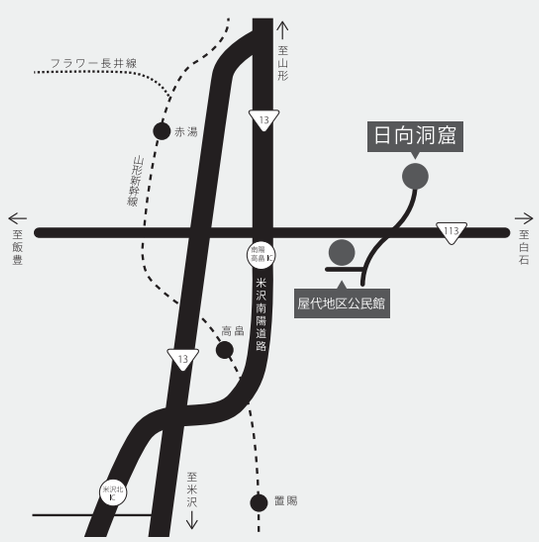
第２部　フリートーキング

「高畠町の洞窟・岩陰遺跡群の今後について」
寒河江 信（高畠町長）、丸山 信也（高畠町教育委員会教育長）、水ノ江 和同、長井 謙治

日向洞窟遺跡発掘調査現地説明会

日向洞窟遺跡の規模と住環境を明らかにするために、昨年度に引き続き、洞窟周辺部の調査を行っています。下記の日程で現地説明会を行いますので、是非、ご来場ください。

日時／平成２７年９月１２日（土）１３：００～１４：００
　　申し込み不要・参加無料
解説／長井謙治
場所／高畠町竹森　現地集合 (案内図参照)
主催・問い合わせ／東北芸術工科大学東北文化研究センター
　　〒990-9530 山形市上桜田 3-4-5
　　TEL.023-627-2168
協力／山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館、高畠町教育委員会



文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究」

東北の集住を考える

ポスト過疎化時代を生きる

日　時

平成 28 年 **10** 月 **29** 日（土）
13：00 ～ 16：30（開場 12：30 より）

場　所

東北歴史博物館 講堂
〒985-0862 宮城県多賀城市高崎 1-22-1　TEL：022-368-0106

プログラム

第1部

13：00 ～ 14：50　研究発表

講演 1　「気候変動と居住形態」
安斎正人（元東北芸術工科大学東北文化研究センター教授）

講演 2　「開発・生業のありかたと集落形態・戸数等の変遷
―中尊寺領骨寺村千年の歴史から―」
入間田宣夫（一関市博物館館長）

講演 3　「船の移動と港町の盛衰」
川島秀一（東北大学災害科学国際研究所教授）

第2部

15：00 ～ 16：30　パネルディスカッション
これからの「集住のかたち」

【パネリスト】
内山節（哲学者）・鬼頭秀一（星槎大学教授）
【進行】
田口洋美（東北芸術工科大学芸術学部教授・同学東北文化研究センター所長）

主　催

東北芸術工科大学 東北文化研究センター

お問い合わせ
東北芸術工科大学
東北文化研究センター
〒990-9530　山形県山形市上桜田 3-4-5
Tel:023-627-2168　Fax:023-627-2155
URL：http://blog.tuad.ac.jp/tobunken/

入場無料
申込不要

開催にあたって

継続的な少子高齢化の進行と若年人口の流出に伴い、東北地方の農山漁村では、極度の過疎化がすすみ廃村の危機に直面している集落も現れています。一方、地方都市の外縁部に広がりつつあるニュータウンや、東日本大震災の復興事業による集団移転など新たな集落形成・再編の動きも加速しています。

人々が流動化し、近世以来引き継がれてきたような集落基盤の維持が困難になりつつあるポスト過疎化時代。今、東北地方では「集落」として人々がひとところに集い暮らすことの意味、あるいは＜集住＞のあり方が強く問われています。

東北芸術工科大学東北文化研究センターでは 2012 年（平成 24 年）度より文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業の採択を受け、東北地方の歴史文化に関する動態的研究に基づき次世代型集落の形成理念構築を目指す研究プロジェクト「環境動態を視点とした地域社会と集落形成に関する総合的研究」に着手してきました。

それは例えば、遥か縄文時代、私たちの祖先は気候変動のなかどのように集住形態を変え暮らしを営んできたのか。あるいは岩手県一関市厳美町本寺地区のように中世から現代に至るまで「集落」を変えずに、支えてきたものは何か。なぜ人々はひとところに集い暮らしてきたのか。また、三陸沿岸集落を形作ってきた人々の論理とはなにか。具体的な集落の変遷から、ともに集い住むことの意味や集落の機能について探ってきました。

本シンポジウムでは考古学・歴史学・民俗学的見地から、これら東北地方での人々の＜集住＞のあり方について見直します。そしてパネルディスカッションでは、これからの集落のあり方や、地方再生の課題について市民の皆さまと一緒に考えたいと思います。多数のご来場をお待ちしています。

パネリスト紹介

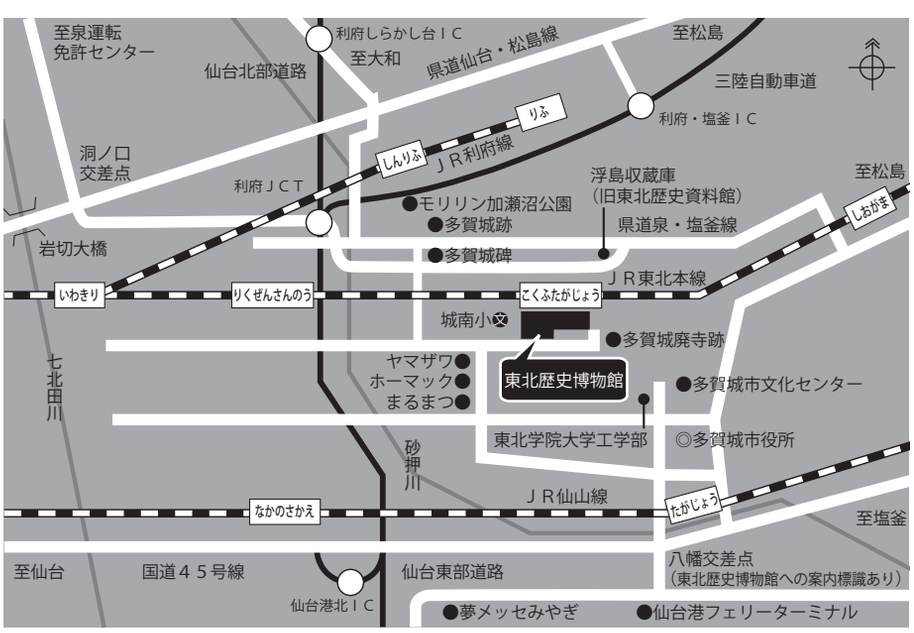
内山 節（うちやま たかし） 氏

哲学者。特定非営利活動法人「森づくりフォーラム」代表理事。1970年代から東京と群馬県上野村を往復する生活を営む。自ら畑を耕し農村で暮らすなかで自然と労働の思想を問い続けてきた。主な著書に『森にかよう道―知床から屋久島まで』（新潮選書、1994年）、『文明の災禍』（新潮新書、2011 年）、『新・幸福論―「近現代」の次に来るもの』（新潮選書、2013年）、『内山節著作集』（全15 巻、農山漁村文化協会、2016 年完結）など。

鬼頭 秀一（きとう しゅういち） 氏

環境倫理学者。星槎大学教授。東京大学名誉教授。生物多様性・自然再生の理念構築や「農」の哲学の構築など、フィールドワーク (社会学的調査) を踏まえて、広く「環境」にかかわる理念に関する研究をおこなっている。主な著書に『自然保護を問いなおす―環境倫理とネットワーク』（筑摩書房、1996 年）、『環境倫理学』（共編、東京大学出版会、2009 年）など。

会場案内



東北歴史博物館　http://www.thm.pref.miyagi.jp/

■ 電車でご来館の場合

ＪＲ東北本線をご利用の場合
国府多賀城駅 隣り
（仙台駅から 14 分）
ＪＲ仙石線をご利用の場合
多賀城駅下車 ⇒ 徒歩約 25 分
又は ⇒ タクシーで約 10 分

※仙台方面からＪＲをご利用の場合、東北本線（国府多賀城駅）のご利用が便利です。

■ お車でご来館の場合

三陸自動車道をご利用の場合
多賀城ＩＣから約 5 分
国道 4 号線苦竹インターから
国道 45 号線を塩釜方向に 8km（約25分）

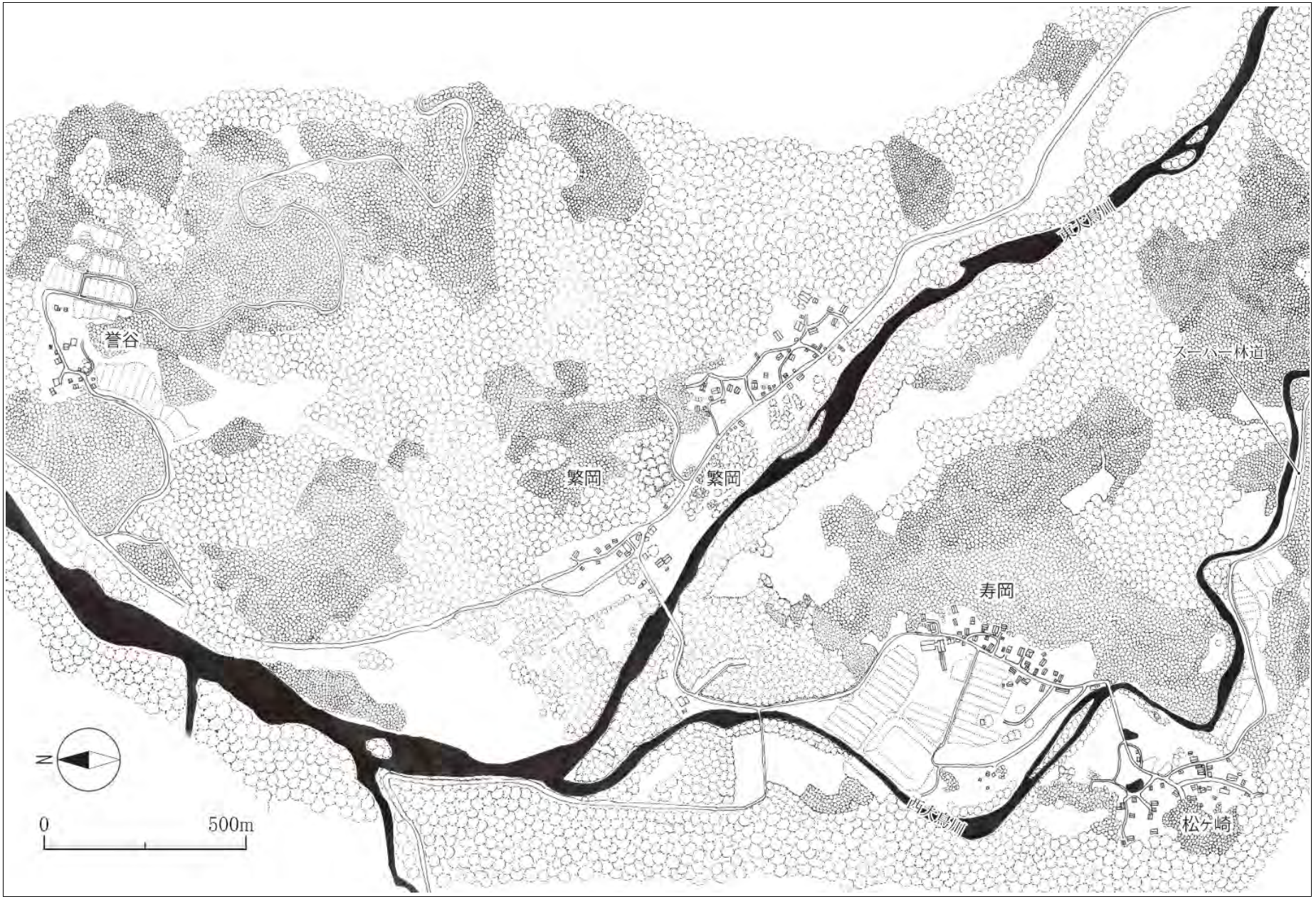
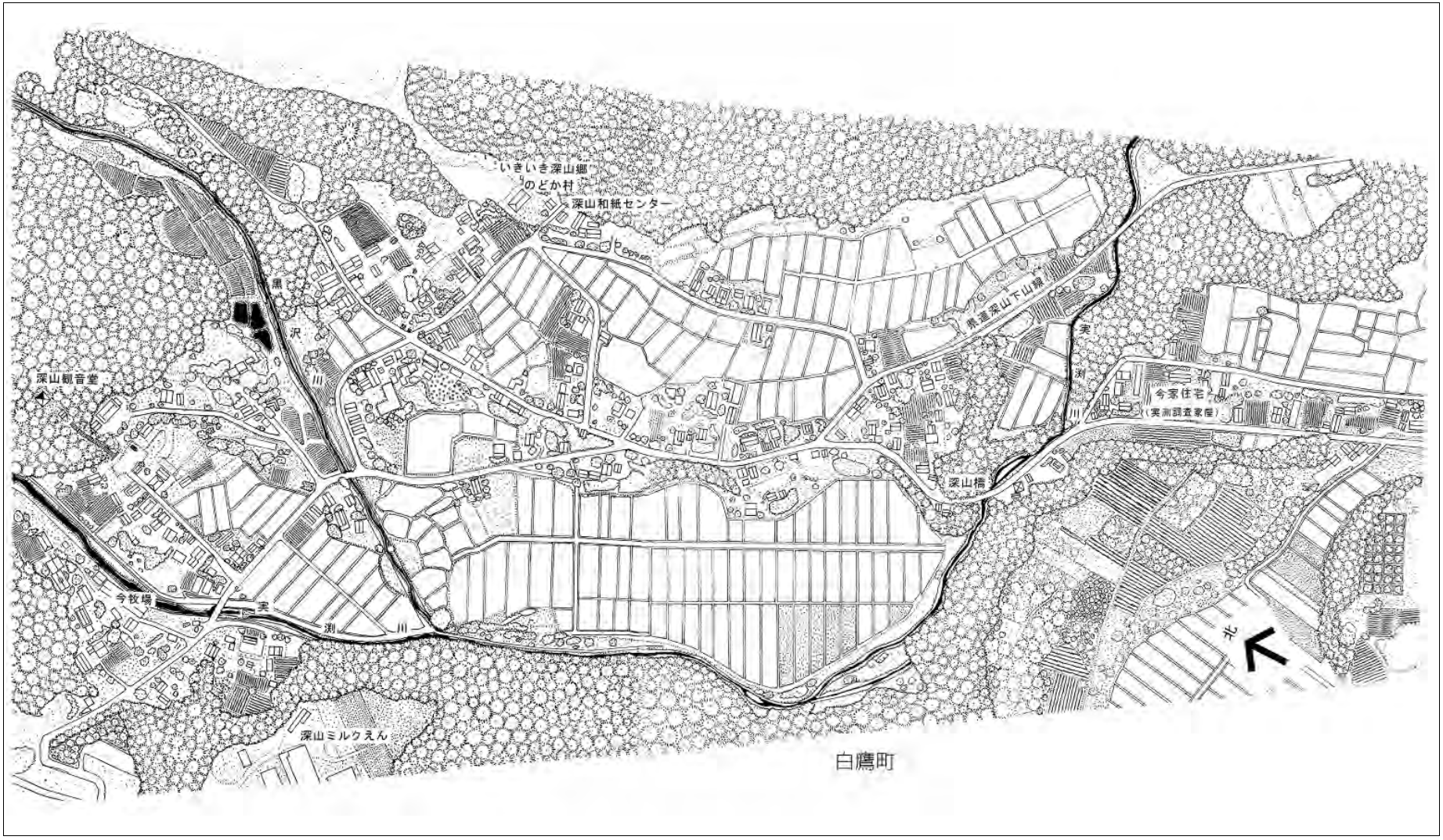
※無料駐車場（普通車 191台・大型バス10台）あり

▲ 交通事情により異なることがあります▲

託児

ご希望により対応しますので、
事前に東北文化研究センターへお申込みください。

山形県鶴岡市大鳥地区集落図（現代）



山形県白鷹町深山地区集落図（現代）